

日の晴も秋は十方に暮にけり  
仰きみる老木の柳散にけり  
秋はもの、殊に名の木の散ゆふへ

遅来

悲しきは雁にもならぬ便かな  
百に手のやかてと、くをちる柳

あすありとたのむの鴈の音に鳴て  
おこたりしみをくゆるけふかな

適莫有といへとも五十六年の交り

一夕の夢となりぬ嗚呼昔は其はし  
めを誘ひ今は其終りを歛む流石に

其交りを思うて只机に寄て黙するのみ  
月を待こ、ろもなくて秋の暮

観山居社徒

露とかけ残して入りぬ四日月  
はせを葉や、ふれて寒き露の音

ゆく月の露のみ草に残りけり  
入月のあとやつめたき神の露

花も実も過し終りや名の木散  
しら露の玉と光りて消にけり

晴霞庵門人

木犀は風のあとほと匂ひけり  
かれて飛尾花光るや西日かけ

遠くから来て鳴墓のわたり鳥  
いくとせの匂ひ残して菊かれし

ゆくかけの残り多きよ秋の雲  
次の間に鳴明しけりきりくす

祖母の亡骸の前に親族みな  
通夜し侍りて

夜を虫の音もくり返す念仏かな  
身の秋や露と消にし人かなし  
入る月のあとは夜寒のなみた哉

仙台 智 幽  
南 明  
一 止

遠州 嵐 牛  
杜 水

資 昌

清 民

春 斎  
壯 山  
文 起

漸 風  
庚 華

清 知

仙 台 河 玉  
結 城 得 来

常 陸 晴 山  
福 良 敬 斎

当 所 春 路  
東 明

孫 晴 山  
曾 孫 旧 池  
曾 孫 せん 女

むかし慈母寡と成給ひし懐に  
養はれて猶六十年の送光に  
恩愛を重ねし身の報ひ奉る  
こともなくてけふの別れとは成けらし

慶応丙寅仲秋

男 桃 丘  
檀齋書 印

⑳ 未明亡父追悼摺

□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□

淋しさや別る、跡の露しくれ

森守女

誰も惜む蘭そ夕へのひとあらし

栗人

萩の花や風といふもの世にありて

寛夫

散る萩にふき添ふ風の匂い哉

汶朝

障子越しに仏の光る月夜哉

保秋

萩原や問ふ人も□き旅の空

西善

風流の散るはな連し夢の秋

北川

人毎に袖をぬらすや萩の露

潭柳

朝風に菊の白露溢れけり

冬鼠

ふんくくと香の匂ふや萩の庭

昇霍

文 音

秋のほたる高ふ飛夜のもの寂し

会陽 志 誠

二つなき御法の花の色見へた

植にし種そ世々に栄る

曾 堅

茂るたけ繁るといへと野分なくは

遊ふ類の秋もみましを

真似蘭

亡父の霊をなくさめんと諸ろ君の

贈られし追句戴て拝読し予

も浮む涙と、もに霊前にをいてめ

もと染るにそ

専と秋はものうきに又鹿の声

未 明

拝 吟

未の秋

奥 守山連